

188. 近江の古代寺院 研究の基礎資料 I

はじめに

旧近江一国からなる滋賀県は、多くの古代寺院が存在する地域として著名である。わけでも、いわゆる飛鳥・白鳳時代に属すといわれる寺院跡は、65箇所前後を数えるに至っている。この数はかつて畿内を構成した大阪府、奈良県について多いものであり、当該期の地域史を考える上で看過できない存在であることは多言を要しない。

この近江の古代寺院については、1989年刊行の『近江の古代寺院』^①により、それまでの研究成果が集大成され、研究はひとつの大きな画期を迎えることとなった。今後、近江の古代寺院研究は大きく進展することと予想されるが、こうした状況のなかにあっても、いまだ充分知られない資料等も少なからず存在する。本稿ではそうした資料の紹介を、ランダムなシリーズと

して実施していきたいと思う。初回の今回は「①伊香郡高月町松尾寺遺跡の軒丸瓦について」「②東浅井郡湖北町立石遺跡の平瓦について」の2題について報告したい(図1)。

①伊香郡高月町松尾寺遺跡の軒丸瓦について

琵琶湖の北東岸に連なる西野山丘陵は、賤ヶ丘から派生し山本山に至る、南北に細長い地累状の山丘である。この山丘の東側を南流する余呉川は、その中位付近でたびたび湛水したため、天保11年(1840)より6ヶ年の歳月をかけ、世に「近江の青の洞門」とも称される西野水道が完成された。当地の伝承によると、かつて水道の沖合には「阿曾津千軒」と呼ばれる大集落が存在したが、地震によって湖中に没し去ったという。

松尾寺遺跡が所在する高月町松尾の集落は、その「阿曾津千軒」の避難民が分住したと伝える7つの集落のうちの一つで、同地内の大森神社は七野宮と呼ばれた阿曾津荘の総社であった。集落北端部の浄土真宗・覚念寺は、最澄の創建と伝えるもと天台宗の寺院で「松尾寺」と称し、己高山の年中行事をとりおこなう「惣



図1 松尾寺遺跡(①)と立石遺跡(②)の位置 S=1:50,000

山之七箇寺」の交衆の一つであったという^②。集落の南側には「大門」と通称される箇所があり、かつて寺院の南大門が存在したと伝える。この付近では以前多数の五輪塔などが出土したというが^④、1978年の発掘調査では江戸期と推定される池状遺構と石組の道路状遺構が検出されたのみであった^⑤（図2）。

一方、集落の中央よりやや南よりの箇所では、かつて住宅の改築がおこなわれた際、多量の瓦片等が出土しており、当地に古代寺院関連遺跡の存在する可能性を示唆している。出土した瓦類は現在所在不明だが、田中勝弘氏によって平瓦1点が報告されている^⑥。写真のみでしか観察できないが、凸面には短小な縄目の叩き締めが多方向から乱雑に施されており、凹面には模骨痕と布目圧痕が、また不明瞭ながら横位に粘土紐の巻き上げ痕らしきものが認められる。

また、これとは別に覚念寺には、かつて当地で出土したという蓮華文の軒丸瓦1点が所蔵されている^⑦（図3）これまで未報告の当該遺物は瓦当全体の約1/3程度の破片で、瓦当文様は複弁8葉の蓮華文に復元される。周縁の外区には粗い線鋸歯文帯、内区には蓮子文帯を巡らし、内区の蓮子文帯はその内外の両側がそれぞれ一重の圈線によって囲まれている。「藤原宮式」に属すものと推定され、田中氏報告の平瓦の年代観とも特に矛盾しない。瓦当の端面には瓦範端の痕跡が明瞭に確認できるので、範は周縁の外側にまで立ち上り及ぶものであることがわかる。枷型は使用されて

いない可能性が高い。胎土には0.5mm程度の小礫を少量含むものの概して緻密である。焼成は堅緻でよく焼き締まり、色調は褐色かかった灰色を呈す。以上により松尾寺遺跡は藤原宮期かそれよりやや時代の降る古代寺院関連遺跡である可能性が高くなった。遺跡の性格については寺院跡とする以外に、山がちな地形から瓦



図2 松尾寺遺跡の概要

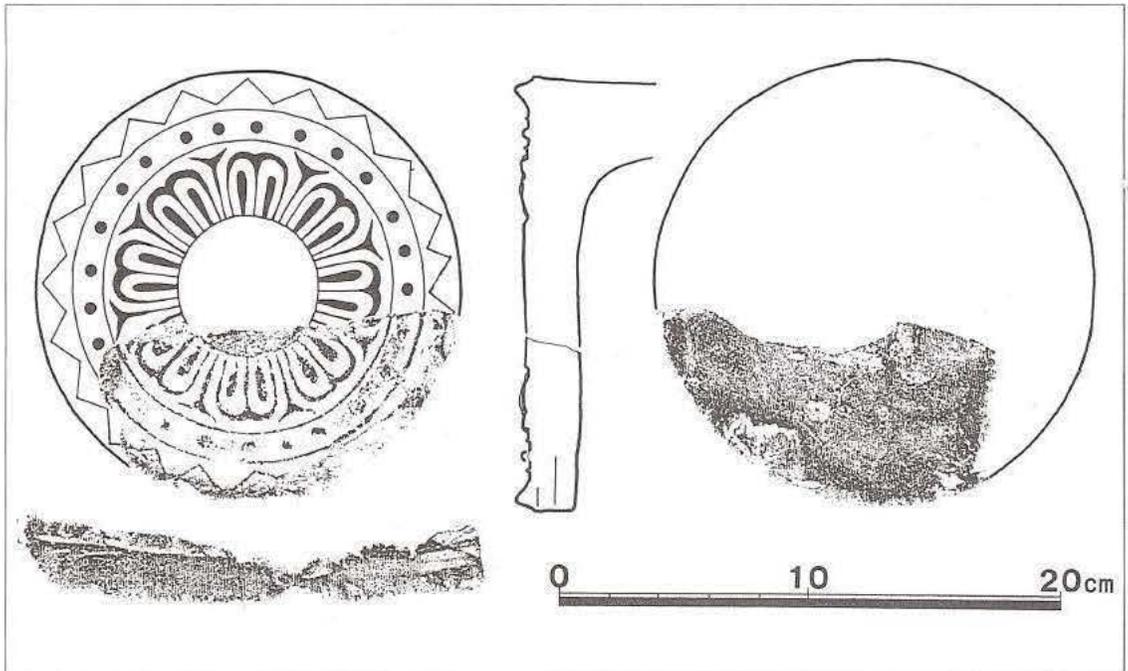


図3 高月町松尾・覚念寺所蔵の軒丸瓦（S=1/3）

窯跡の可能性も考慮しておきたい。

つぎにこれと関連して、近江における「藤原宮式」軒瓦を概観しておきたいが(図4)、まず典型的な「藤原宮式」軒瓦(I a類)出土遺跡としては大津市石山国分廃寺、檀木原瓦窯、草津市花摘寺廃寺、彦根市高宮廃寺出土品があげられる。また坂田郡米原町の三大寺廃寺と同郡山東町の法泉寺遺跡では、忠実な文様構成を保った「本薬師寺式」軒瓦(I b類)が出土している^⑦。これら近江出土の「藤原宮式」および「本薬師寺式」軒瓦については、西田弘氏や辻広氏、坪之内徹氏の研究^⑧があり、それらによると国分廃寺と花摘寺廃寺出土品は藤原宮出土品と同範品で、高宮廃寺出土品はそれを模倣して製作された可能性のあることが指摘されており、中央での造寺、造宮、造都とそれにかかる瓦工集団の関係、あるいは壬申の乱との関係が論じられている。当松尾寺遺跡出土品は小破片のため中房部など不明の部分も多いが、文様構成の全体的な印象や、かつて出土している平瓦が「粘土紐桶巻き作り」の可能性もあることなどを考慮すると、6275系統に属するものかもしれない^⑨。

このほか「藤原宮式」に類似する軒瓦^⑩としては、大津市膳所廃寺の周縁に蓮子文帯のみを施すもの(II類)、伊香郡高月町井口遺跡の膳所廃寺と同様のII類および蓮子文帯の外縁の複合線鋸齒文帯を施すもの(III a類)、安土廃寺の面遠鋸齒文帯を施すもの(III b類)の存在があげられる。近江におけるこれらの「藤原宮式」軒瓦を、亜式をも含めて全体として眺めた場合、I類を中央との直接的な関係から1次的な分布を示すものとするれば、II類およびIII類はそれに対してその周辺に2次的に分布するものといえる可能性がある。しかしながらそれらのうち、井口遺跡出土の少なくともII類の軒丸瓦については、瓦当がいわゆる一本造りにより形成されるものが存在するなど、複雑な様相を示している。今後の資料の増加をまって再検討したい。

②東浅井郡湖北町立石遺跡の平瓦について

松尾寺遺跡の南西約9kmの東浅井郡湖北町郡上地先において、地元在住の百々正志氏により、瓦片1点が少量の土師器片等とともに採集されている。遺物の採集地は虎御前山北東端の通称「立石」と呼ばれる谷内の平坦地である。遺物量の少なさから、遺跡の性格等は明らかにできないが、以下簡単に遺物のみの報告をしておきたい(図1, 5)。

採集された瓦片は平瓦と推定される。凸面には「米」状の叩き締め圧痕が認められ、凹面には密な布目圧痕が観察される。胎土は少量の砂粒を含むものの緻密で、焼成は堅緻で色調は赤黒色を呈している。

この瓦の所属年代について考えるとき、まずともに採集された土器片の存在を考慮しなければならない。

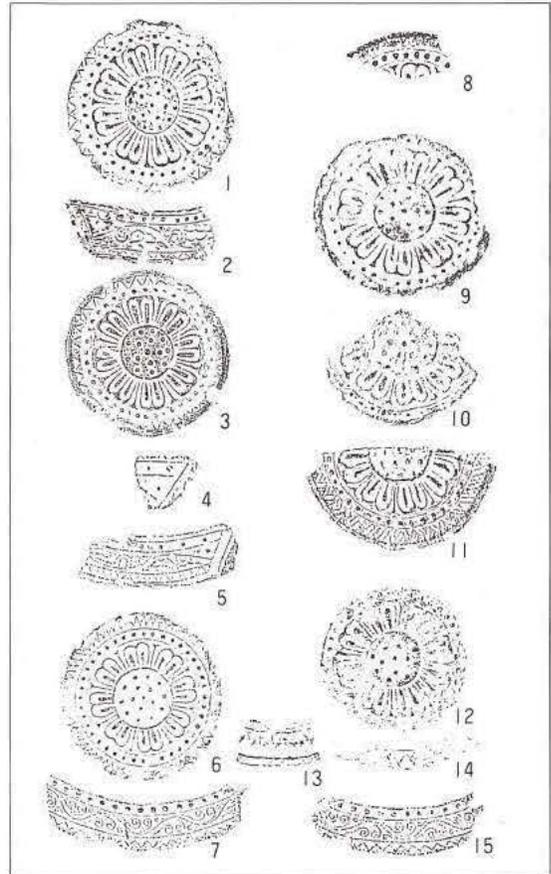


図4 近江出土の「藤原宮式」軒瓦

1~2: 国分廃寺、3~4: 花摘寺廃寺、5: 高宮廃寺
6~7: 三大寺廃寺、8: 檀木原瓦窯、9: 膳所廃寺
10~11: 井口遺跡、12~14: 安土廃寺、15: 法泉寺遺跡

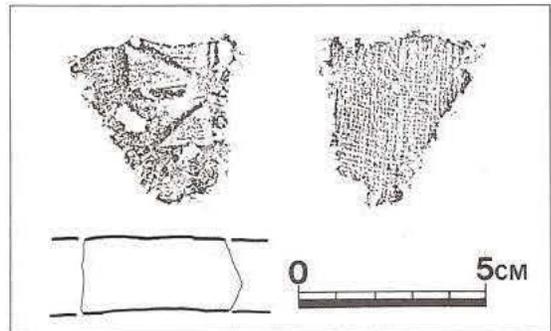


図5 湖北町郡上・「立石遺跡」採集瓦(S=1/2)

しかしそれらは土師器片らしいとわかるだけの小破片であるため参考にはなりにくい。そこで瓦そのものを観察すると古代から中世までの年代が想定される。そうした場合、まず当地が浅井氏三代の小谷城下であったことが想起される。しかしながら城内や城下の中心であった清水谷においてすら、これまでのところ瓦葺建物の存在は全く確認されていないこと^⑪を考慮すると、現状では中世を瓦の所属年代から除外するのが適

当である。したがってこの瓦は古代の所産、しかも県内での瓦葺建物の消長の趨勢を考慮すれば、白鳳期から奈良時代までの年代を想定するのが妥当なところである。

つぎに「米」状の叩き締め圧痕の類例を県内で求めると、伊香郡西浅井町諸川瓦窯の3類と報告された平瓦^⑧同郡高月町井口遺跡のb類と報告された軒平瓦等^⑨が上げられる(図6)。両者はいずれも白鳳期の所産で、前者は平瓦凸面の叩き締め圧痕だが、叩き板の文様は単純な「米」状でなく、あたかも「クモの巣」状叩きと表現したいようなものである。後者は粘土紐巻き上げの平瓦の広端面に、「米」状のスタンプを連続して押捺し軒平瓦とした特殊なものである。これらと比較して当「立石遺跡」例は、使用法としては前者、文様の構成からは後者に近い。三者はいずれも全く同じものではないが、今のところ「米」状文様の瓦への使用例は他に類例がなく、少なくとも県内では湖北地域に集中する可能性が指摘される。(北村圭弘)

注

- ① 小笠原好彦、田中勝弘、西田弘、林博通(『近江の古代寺院』近江の古代寺院刊行会 1989)
- ② 以上の伝承等については以下の文献を参照した。柴田實(『滋賀県の地名』平凡社 1991)
- ③ 以上の伝承等については覚念寺住職・松尾賢静氏より多くの御教示を得た。
- ④ 田中勝弘(『第1章 高月町松尾寺遺跡』『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書VI-1』滋賀県教育委員会、勉滋賀県文化財保護協会 1979)
- ⑤ 注①文献P 601~603、図版226、注③文献P 13~14
- ⑥ 他に古保利古墳群中の宮山3号墳出土と伝わる遺

物も所蔵されている。同墳は家形石棺を内納する横穴式石室墳である。注③文献P 5~7参照。

- ⑦ 桂田峰男(『坂田郡山東町法泉寺遺跡』『山東町埋蔵文化財調査報告書III』山東町教育委員会 1986)
北村圭弘(『正恩寺遺跡出土の瓦について』『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書XV-1』滋賀県教育委員会、勉滋賀県文化財保護協会 1988)
法泉寺遺跡と三大寺遺跡の出土瓦類には平瓦などにも共通する要素が多く、「本薬師寺式」の軒平瓦も同範の可能性が高い。
- ⑧ 辻広志(『花摘寺廃寺出土の藤原宮式瓦』第1回滋賀県埋蔵文化財センター研究会資料 1980)
坪ノ内徹(『畿内周辺地域の藤原宮式軒瓦』『考古学雑誌』68-1 1983)
- ⑨ 奈良国立文化財研究所(『飛鳥・藤原宮発掘調査報告II』 1978)
奈良国立文化財研究所(『平城宮出土軒瓦形式一覧』 1978)
- ⑩ 註①文献等による。
- ⑪ 中村林一ほか(『史跡小谷城跡環境整備事業報告書』湖北町教育委員会 1976)
葛野泰樹(『小谷城清水谷遺跡発掘調査報告書』湖北町教育委員会、勉滋賀県文化財保護協会 1978)
小野正敏ほか(『史跡小谷城跡』湖北町教育委員会、小谷城保存会 1988)
- ⑫ 用田政晴(『諸川遺跡発掘調査報告書』西浅井町教育委員会、勉滋賀県文化財保護協会 1984)
- ⑬ 田中勝弘(『国道365号線バイパス工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書II』滋賀県教育委員会、勉滋賀県文化財保護協会 1984)なお北東部に隣接する同町華寺遺跡でも同様の軒平瓦が出土する。

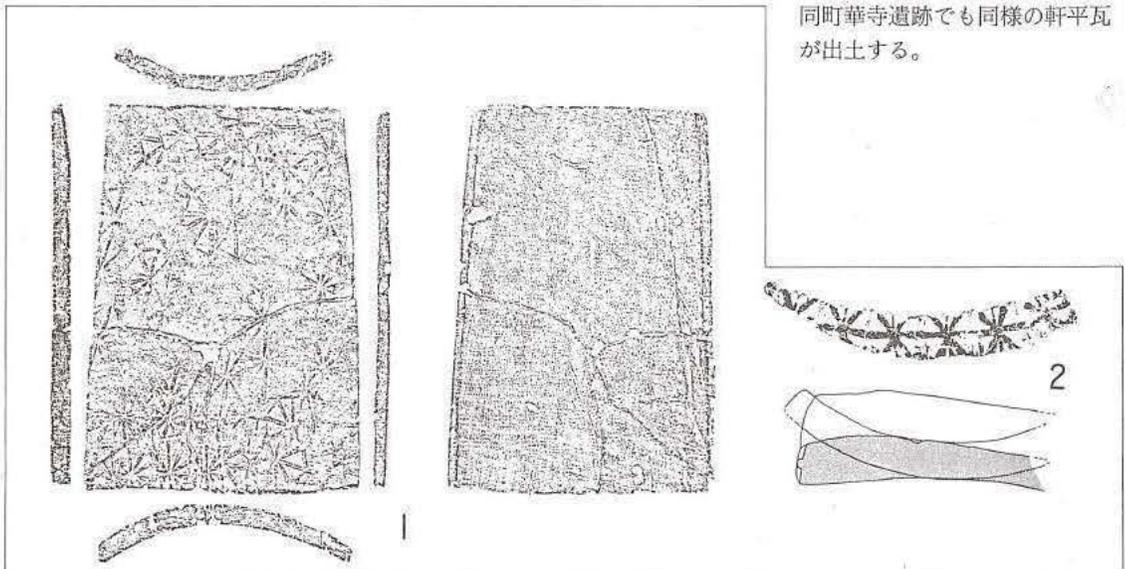


図6 近江出土の「米」状施文のある瓦類 1: 諸川瓦窯 2: 井口遺跡